３． 重信川水系の社会特性

３．１ 土地利用

３．１．１ 土地利用の概況

重信川は流域の約 70%を山地が占め、田畑等の割合は約 20%、宅地等約 10%となっている。

沿川市町別に見ると、松前町が沿岸部に位置し、山林面積が 0%で田面積が 47%であるのを除くと、全市町とも山林の割合が最も大きい。旧松山市、松前町は宅地面積が約 20%であるが、旧伊予市、旧重信町、旧川内町、旧砥部町は 10%以下となっている。

表 3.1.1　市町別地目別土地面積　（単位：km²）

現在の区分	合併前の区分	田	畑	宅地	池沼	山林	牧場･原野	その他	総数
松山市	旧松山市	30.91	25.06	46.47	1.31	67.07	0.68	47.69	219.18
伊予市	旧伊予市	8.87	9.48	4.81	0.00	21.47	0.02	8.10	52.75
東温市	旧重信町	8.40	1.89	3.56	0.53	12.16	0.49	45.98	73.01
	旧川内町	6.75	3.21	2.22	0.05	48.00	0.54	50.07	110.86
松前町	松前町	9.32	0.57	4.78	0.05	0.00	0.00	5.19	19.91
砥部町	旧砥部町	1.65	12.89	2.81	0.00	28.89	0.18	10.78	57.20

注）「その他」は、塩田、鉱泉地、雑種域の合計

出典：愛媛県統計年鑑（平成 16 年版）

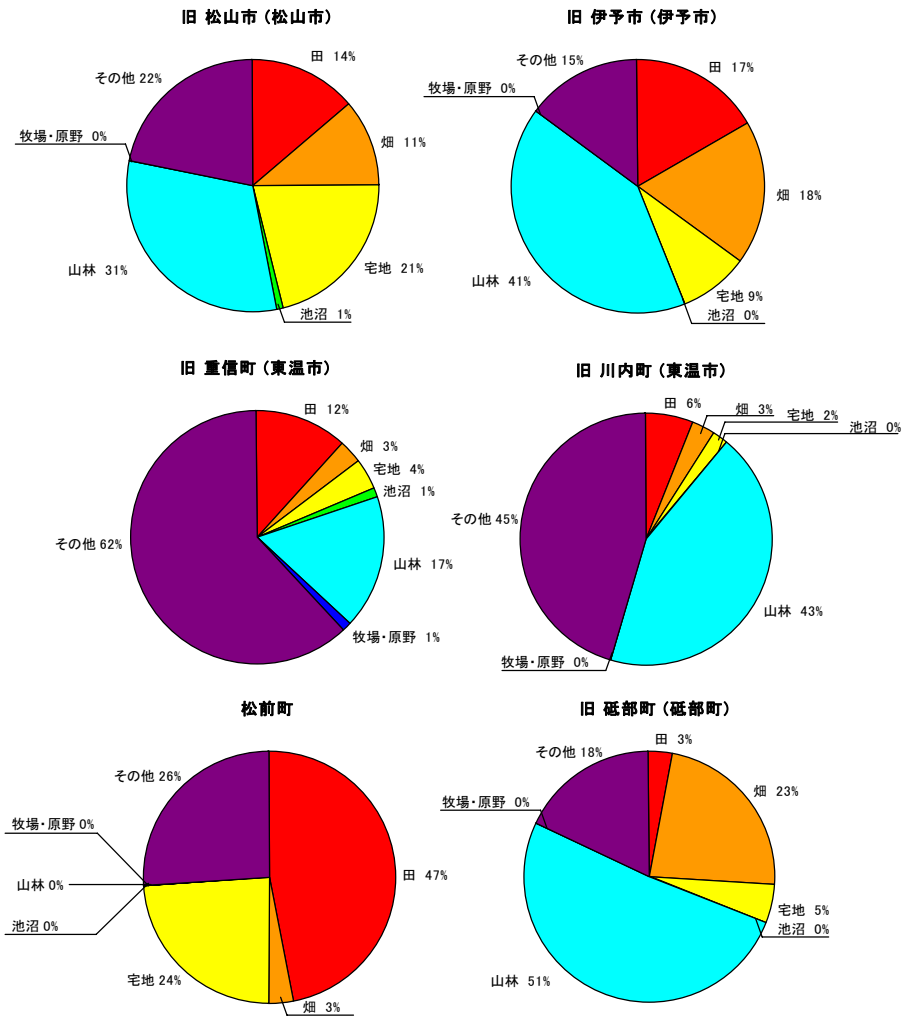


図 3.1.1　市町別の土地利用割合

３．１．２　地目別土地利用の推移

(1)　宅地面積

愛媛県、重信川沿川旧 2 市 4 町とも増加傾向にあり、重信川沿川旧 2 市 4 町は、35 年間で約 2.8 倍に増加している。

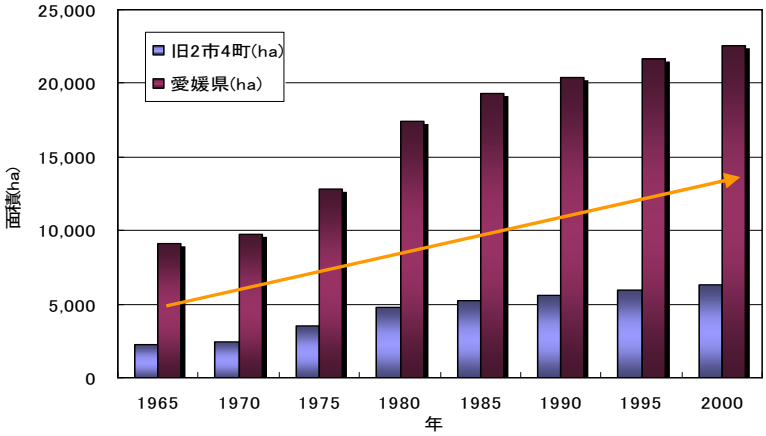


図 3.1.2　宅地面積の推移

(2)　水田面積

愛媛県、重信川沿川旧 2 市 4 町とも減少傾向にあり、重信川沿川旧 2 市 4 町は、35 年間で約 7 割に減少している。

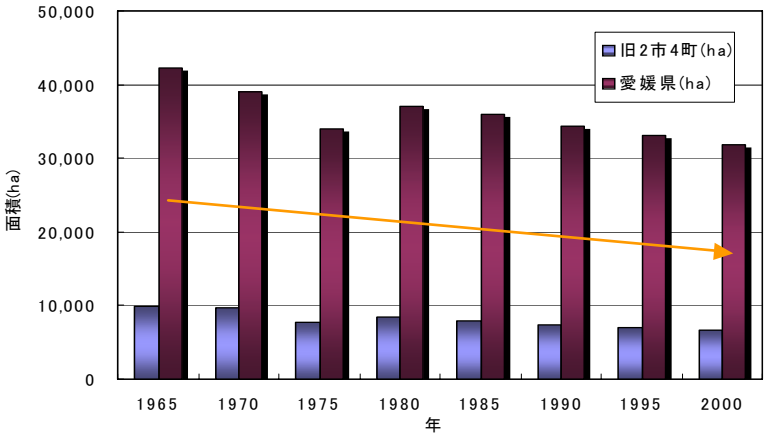


図 3.1.3　水田面積の推移

(3)　果樹園面積

愛媛県、重信川沿川旧 2 市 4 町とも 1975 年をピークに、その後減少傾向にある。

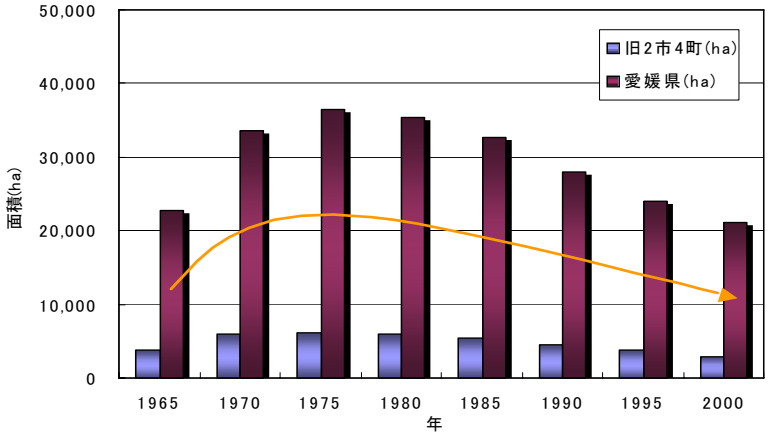


図 3.1.4　果樹園面積の推移

３．１．３　土地利用の経年変化

下流域の松山市周辺で市街化が進むとともに、国道や鉄道沿線に市街地が発達。近年、松山自動車道が完成し、ますます流域の開発が進んでいる。

昭和３年頃

現　在

凡　例
市街地

図 3.1.5　土地利用の変化

３．２ 人　口

重信川沿川は県都松山市をはじめ 3 市 2 町にまたがり、沿川市町人口は約 64 万人（2004 年）で愛媛県全体の約 43%を占めている。松山市は流域の下流域に位置し、人口は下流域に集中している。

沿川市町人口の推移は、過去 39 年間（1965 年～2004 年）を見ると、流域全体では約 50%の伸びを示している。特に松山市、旧重信町、旧砥部町の伸びが著しい。愛媛県内の人口推移と比較すると、重信川流域は人口の増加率の多い流域であるといえる。

表 3.2.1　市町別人口の推移　（単位：人）

市町名	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2004
旧松山市	282,651	322,902	367,323	401,703	426,658	443,322	460,968	473,379	478,674
旧重信町（東温市）	14,041	14,056	17,624	20,070	21,380	21,542	22,517	23,658	23,912
旧川内町（東温市）	10,068	9,313	9,005	9,206	9,926	10,211	10,541	11,043	11,166
松前町	22,698	23,900	26,639	27,568	28,697	29,407	30,106	30,277	30,735
旧砥部町	10,613	11,659	13,674	16,458	17,963	19,561	20,493	20,961	21,024
旧伊予市	28,611	27,769	27,805	29,725	29,826	29,803	30,270	30,547	30,501
愛媛県	1,446,384	1,418,124	1,465,215	1,506,637	1,529,983	1,515,025	1,506,700	1,493,092	1,476,248

出典：国勢調査および推計人口　（2004 年のみ推計人口で 9 月の値）

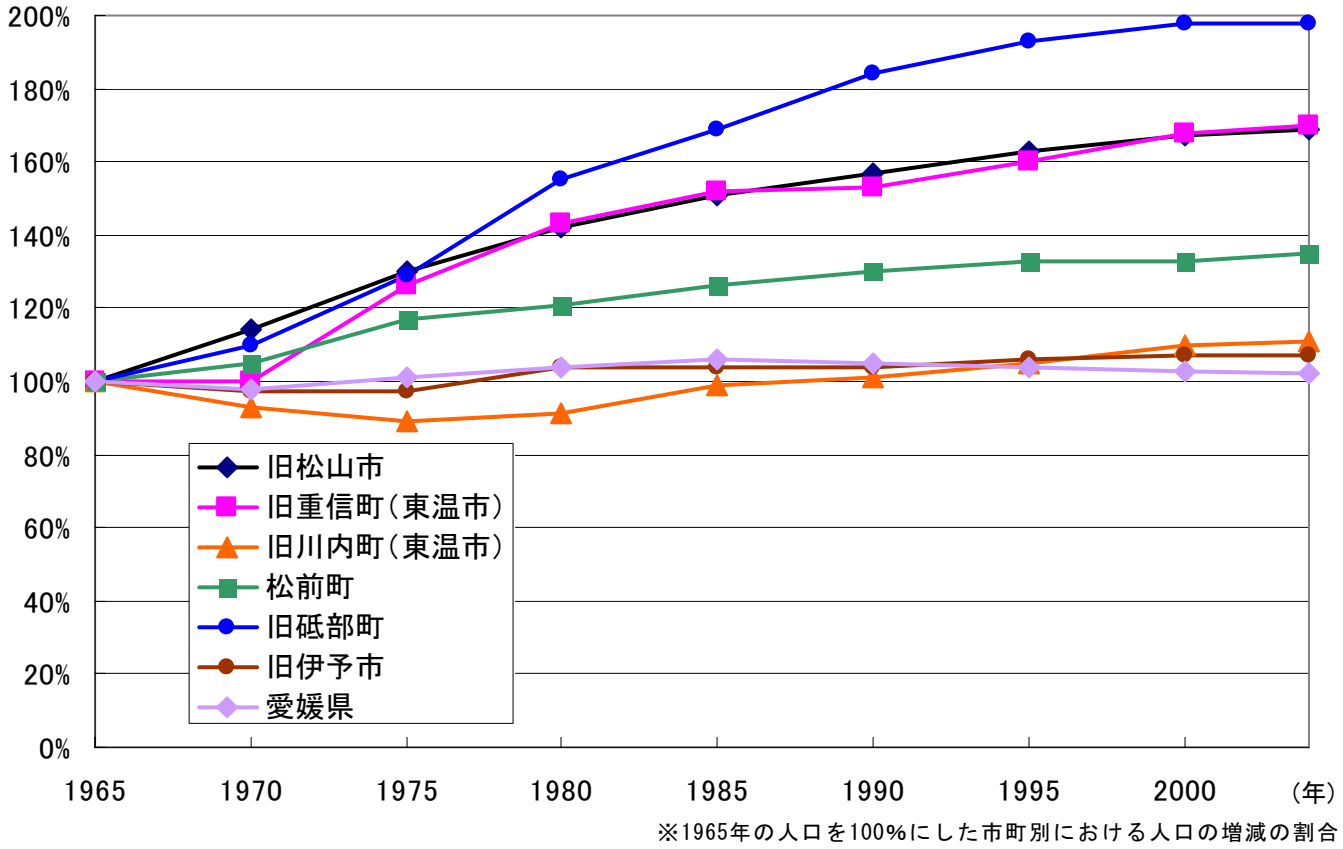
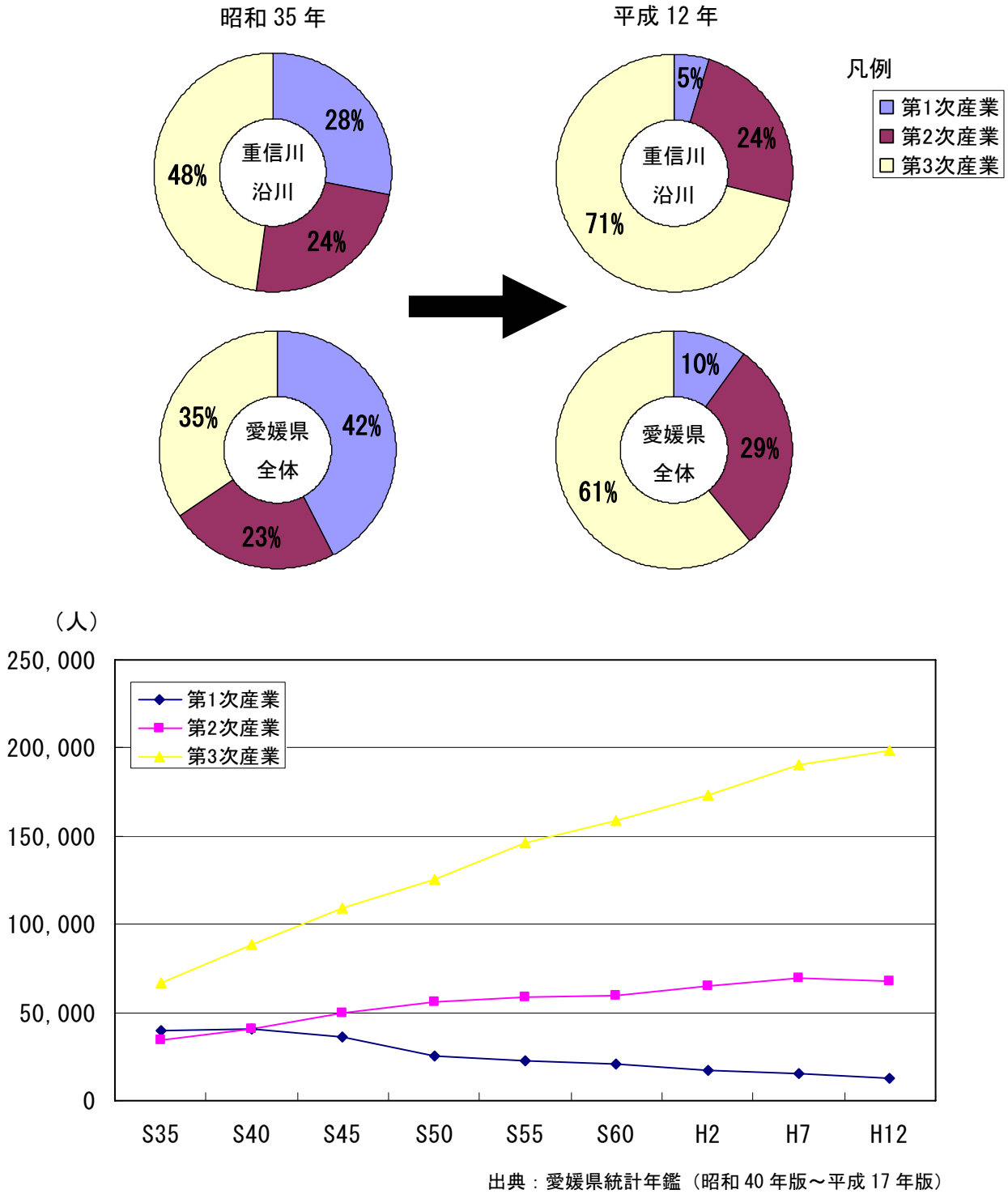


図 3.2.1　重信川流域周辺市町の人口の推移

３．３ 産　業

重信川沿川（旧松山市、伊予市、東温市、旧砥部町、松前町）の産業別人口は、近年著しい変化をみせている。第 1 次産業人口比率が昭和 35 年の 28%から平成 12 年には 5%に減少し、第 3 次産業が 48%から 71%に増加している。

第 3 次産業人口増加率の背景には、道後温泉を中心とした観光業や松山市の商業等の発達が起因している。



出典：愛媛県統計年鑑（昭和 40 年版～平成 17 年版）

図 3.3.1　産業別人口の推移

３．４ 交　通

流域内の幹線道路は松山市を中心に放射状に広がっており、国道 11 号により松山市と東温市（旧重信町・旧川内町）、国道 33 号により松山市と砥部町が結ばれている。また、石手川沿いに国道 317 号（松山市～今治市）の整備が進められており、地域間の利便性の向上が期待されている。

鉄道に関しては、JR予讃線が沿岸部を南北に通過しており、地域内の主要都市間の軸線を形成している。一方、伊予鉄道が沿岸部から松山市を経て重信川と並走しながら、東温市の横河原まで東西に通過しており、流域内の縦断的なアクセスが図られている。

図 3.4.1　松山市近郊の交通網

３．５ 将来構想

重信川流域は、「第五次愛媛県長期計画新しい愛媛づくり指針（平成 12 年 3 月）」において、松山圏域に含まれ、同圏域の基本計画は、次の通り策定されている。

(1) 圏域の目標像

活力に満ちた多彩な産業と創造性豊かな学術・文化が融合するとともに、交通ネットワークの充実や高度な都市機能の集積が進み、世界に開かれた中四国地域の中核拠点として成長する圏域をめざす。

(2) 圏域づくりの基本方向

① 高次都市機能を備えた中核都市圏の形成
② 世界に開かれた国際交流拠点の形成
③ 21 世紀をリードする産業創造都市の形成
④ 利便性が高く安心で快適な生活空間の形成
⑤ 都市との交流による農山漁村の活性化と魅力的な観光地の形成
⑥ 交流・連携を促進する基盤の整備